

『瑜伽師地論義演』について (二)

吉 田 道 興

昨年 の 発表 は、『義演』(以下、他の書名も含め適宜略称)の基礎的考察、すなわち撰者の清素、撰述年、巻数、引用書目などについて、先学の教示を元に多少の論及をした。その後、『印仏研究』(29巻2号)誌に掲載できなかった分を補足的に『曹洞宗研究紀要』(13号)誌(統『瑜伽師地論義演』研究)にその撰述頃の時代背景、瑜伽論各巻の該当箇所一覽表、それに日本唯識関係書に引かれる清素の所説などについて触れた。

今回は、引続き中国における唯識学研究の一環として『瑜伽論』の諸註釈の中で『義演』はどのような位置にあるかを中心に考察したい。なお撰者清素の思想については『義演』だけでは不十分であり、さらに日本唯識関係書の所説を整理してから改めて考察してみたいと思っている。

周知の通り、『統高僧伝』の記事には、玄奘による新訳の唯識諸論の盛行前に旧訳の『地論』『撰論』の講学と註釈の盛行があったことが知られる。概説的にいえば、中国南北朝

時代、まず北魏の永平元年から同四年(508-511)までに『地論』が菩提流支・勒那摩提によって共訳(論序)され、主に洛陽や鄴の地で流行した。次に太昌三年(531)仏陀扇多によって洛陽白馬寺で『撰論』が訳された。この『撰論』は、さほどの流行をみななかったが、陳の天嘉三年(563)真諦による『撰論』が広州制旨寺で訳されると、広州から揚都、また建業、そして洛陽・長安などの北方の地へと広く伝播し、講学と註釈がなされたのである。

『瑜伽論』は、その本地分の別訳である『十七地論』と撰決択分の別訳である『決定藏論』が真諦によって太清四年(504)前後、富春(浙江省富陽県)において訳されているが、これはあまり流行をみなかったようである。ところが、貞観二十三年(648)長安(大慈恩寺、一説弘福寺)において玄奘が多くの参訳者の協力を得て『瑜伽論』百巻を全訳した。なお『三十頌』も同年に訳されているが、『成唯識論』は十一年後の顯慶四年(659)、長安玉華寺において訳された。この『成

唯識論』が内容と規模の上から結果的に唯識学の中心的論書として今日まで珍重され長く研究されてきたのであるが、その『成唯識論』の翻訳前は、玄奘の主たる入竺の目的が『瑜伽論』の請求ということもあり、特に『瑜伽論』が玄奘門下を中心に数多くの講学がなされ、また註釈書が撰述された時期もあったことが窺えるのである。勿論、先の『地論』や『摂論』、そして『瑜伽論』や『成唯識論』でも、それらの講学や註釈の研究は、重層的かつ漸次に盛行が移っていったものであることはいうまでもなからう。

さて『瑜伽論』の漢本による註釈書は、結城令聞氏著『唯識学典籍志』(昭和37年刊)によれば、約六十本が知られている。しかし、現存するのは、最勝子等菩薩造『釈』(玄奘訳)、慈恩大師撰『略纂』『劫章頌』、道倫撰『記』、智周撰『疏』(朝鮮本)、清素撰『義演』、遍智撰『劫章頌疏』『劫章頌記』、法成撰『分門記』『手記』とある。この中、『劫章頌』は、『瑜伽論』百巻における劫(カルバ)の概念を頌文を以てまとめたものであり、『劫章頌疏』『劫章頌記』はその註釈であるから他のそれとは異なる。ところで右の『疏』は、筆者未見のものであり、その内容も不明である。従って一応、直前の三書と合わせて本稿では考慮から外しておくことをあらかじめお断りしておきたい。

右の四本を除き、現存する註釈書を時代順に並べると、永

徽元年(69)訳『釈』、貞観二十三年(69)永淳元年(69)撰『略纂』、初唐(時期不明)撰『記』、貞元十七年(801)頃撰『義演』、大中十二年(858)頃撰『分門記』『手記』となる。なお『記』は、新羅興輪寺道倫の撰述であり、新羅における唯識学研究の成果の一として挙げられる。また『分門記』『手記』は敦煌文献であり、撰者法成は吐蕃(チベット)出身僧であることに注目しておきたい。さてこの中、『釈』と『記』はまとまって存するが、『略纂』と『分門記』は後半部が逸亡し、『義演』は部分的に欠巻欠損があり、『手記』は前半のそれも一部分だけである。

論述組織は、『手記』を除き、他はいずれも前半部が存するので容易に比較することができる。そこで次に『手記』を除いた五本を図示して簡単にその相違を述べてみよう。

釈	略纂	記	義演	
	掃敬偈 (六門料簡)	掃敬偈 (六門分別)	(序)	
所為如何 所因如何 名義如何	一、叙所為 二、彰所因	一、叙所為 二、彰所因	一、明宗緒 二、顯歲撰 三、明宗要	一、叙起論因 二、所為門 三、所因門
(宗要) (歲撰)	三、明宗緒 四、顯歲撰	三、明宗要 四、顯歲撰	三、明論宗体 四、歲乘所撰	二、所為門 三、所因門
(釈論)	五、解題目 六、積本文	五、解題目 六、積本文	五、弁惣別題 六、依文製釈	(釈論正文) 一、釈論題目 二、釈論正文

『釈』は、以後の註釈書にいずれも引用され、多大な影響を及ぼしている点で重要である。『釈』の冒頭には、七言二十八句の「帰敬偈」が掲げられている。『略纂』はそれをそのまま掲げ、『分門記』はその本文を挙げず科段の中の帰敬門としてさらに五門に分段している。『記』『義演』には本文・科段共にその偈はない。なお『義演』の冒頭には、序文に相当する文がある。

次に『釈』は、「今説此論所為如何」「今説此論所因如何」「今説瑜伽師地論者、名義如何」と三つの設問を立てそれに解答説示している。『略纂』『記』『義演』は、それを六門の一として取り上げ、『分門記』は釈論正文に先立つ三門の義の一としている。

続いて『釈』には、この論は十七地を宗要となす旨を説く。これは『略纂』の「明宗緒」、「記」の「明宗要」、「義演」の「明論宗体」に該当する。『分門記』は先の所因門に含めている。『釈』はその後に、この論は諸乗境等を明かし、また論の中に示す問答は諸法性相を決択するが、その意は菩薩の爲にあつて一切が皆善巧を得、仏果を成じ利樂を無窮ならしめるものであるとする。従つてこの論は菩薩藏阿毘達磨に属し、菩薩に得勝せしめんとするものである、と示す。これは『略纂』『記』の「顕藏撰」、「義演」の「藏乘所撰」であり、『分門記』はこれを所因門に含む。

『釈』はさらにこの後、「云何瑜伽師地、謂十七地」と「何等十七」の設問をしてこれに解答説示している。これは『略纂』『記』の「解題目」、「義演」の「弁惣別題」、「分門記」の「釈門題目」に相当する。

『釈』は、最後に十七地の各名を出しながらその内容を略述している。各註釈書はこの『釈』の所述を承けながらそれぞれ相違するのである。『略纂』は本論の各巻各地毎に大小の科段を示し、諸経論や諸師の説を引き、また重要な語句や内容を詳細に説いている。これらの点は『記』もほぼ同様である。ただ『記』は引用が非常に多く撰者の説はあまり明示されていない。ところで『義演』は、『略纂』や『記』と比較すれば、それらの引用は少なく、また内容的には「科段」に力を注いでいる感がある。『分門記』に至つては、諸経論や諸師の説は見当らず「科段」そのものであるといつてよい。なお『手記』は『分門記』を補うように主要な語句を随意に取り上げて説示して、一種の「辞書」的趣向がある。

つまり『義演』の外見的形態は、『略纂』『記』と『分門記』の中間的位置にあり、いくらか諸説を引き論及している部分もあるが全体的には「科段」の色合いが濃厚である点にその特徴があるといえる。

『義演』の引用書目は、既に昨年掲げたが本稿では『略

纂』と『記』のそれとを合わせ書名と人名の多い順から十五位までに限り、次に列挙してその傾向をみることにしたい。

	略纂	記	義演
1	対法論	景師(惠景『疏』か)	成唯識論
2	成唯識論	基師(『略纂』など)	顯揚論
3	対法論疏	泰師(神泰『疏』か)	対法論
4	顯揚論	測師(円測『疏』など)	釈論(『釈』)
5	法師(玄奘)	三蔵(玄奘)	俱舍論
6	俱舍論	備師(文備『疏』か)	涅槃經
7	釈論(『釈』)	達師(惠達『疏』か)	婆沙論
8	唯識疏	遠師(慧遠『義章』など)	雜集論
9	撰論	玄庇(『成唯識開發』か)	深密經
10	十地經	玄(僧玄『五種性義』か)	仏地論
11	景師(惠景か)	奘(道奘『三性義』か)	撰論
12	別章(別抄、別鈔)	靈雋(『雜集論疏』か)	顯宗論
13	太師(極太か)	元眺(『疏』『中実』か)	順正理論
14	涅槃經	光(普光『光抄』か)	護法積
15	緣起經	範(玄範『成唯識疏』か)	安慧積

一見してまず『略纂』と『義演』の引用傾向が似ている点に気づく。一方『記』はその当時までの中国と新羅出身の諸論師の名が書き出され、その所説を引いている点に特徴がある。なお『略纂』には、右の表の他に備師・靈雋師・泰師・俊師などの人名も散見できる。『記』所引の諸師とその撰述書などに関しては江田俊雄・勝又俊教の両氏の研究があるの

で詳しくはそれに譲るが、右の他にも多数の中国と新羅出身の人名が見出せる。しかし『義演』には、印度人諸論師の名は数人散見できるが、中国人論師は『略纂』の撰者(慈恩大師基)ただ一人である。この点に不審が残る。新羅の道倫でさえ『記』に多数の諸論師の所説が引かれているのに中国人の清素がなぜそれらの所説を引かなかったのか。単にそれらの註釈書や所説を知らなかったためであろうか、それとも知りながらあえて引かなかったためであろうか。いずれにしてもこの点に『義演』撰述の特殊性を暗示していよう。『分門記』のように「科段」に徹底していればむしろ諸説の引用は繁雑になる。つまり『義演』は、『略纂』のみの註釈と科段を参照して独自の註釈と科段を作成した訳である。

次の課題として右三本の科段を詳しく比較してみたいと思つている。

(愛知学院大学講師)